

## 第5回これからの北海道立近代美術館検討会議 議事録

日時 令和4年(2022年)9月7日(水) 10時00分~11時50分

場所 Web会議システム ZOOM

出席者 別添「出席者名簿」のとおり

- 議題 1 近代美術館のミッション案等  
2 施設設備の現状と課題

### 議事

#### (1) 議題1 近代美術館のミッション案等

##### ア 事務局から資料1及び資料2に基づき説明 (特記事項)

###### ○資料作成の要旨

- ・ミッション案は「道民すべて」として、包摂性を強調し、また、グローバルな課題にも目を向けていることが世の中に伝わるようにした。「公共」という言葉は、オフィシャルであるということだけではなく、すべての人々に共通するもの、開かれているという意味がある。また、素敵であって欲しい、ワクワクする場であって欲しいなどの期待に応え、美術館自身がクリエイティブであることが欠かせないと考えた。
- ・コンセプト案は、美術館が利用者にどのように働きかけるかということをも端的な動詞で表している。アーカイブについては、アクセシビリティの向上に含まれ、アクセスは資料へのアクセスという意味も含んでいる。人間と自然の営みとの調和に持続性や環境への配慮を含めた、社会的課題を生な形ではなく、少し柔らかく伝えていく方が美術館にはふさわしいと考える。

##### イ 質疑応答等 (有・無) (菊地委員)

ミッション案について、2行目に「多様性の尊重等」とあるが、ここだけ具体的に書く必要もない。

また、「今日の課題」とあるが、下から2行目に「未来に向かって」となっており、矛盾が生じている。

「今日の課題」ではなく、環境問題など未来に向けた課題についても視野に入れながら、将来世代のためにもグローバルな視点の文言、例えば「サステナビリティ」や「持続可能性」といった文言があった方がよい。

コンセプト案は、全体としては動詞となっていて、アクションがわかりやすく、非常に共感を持てる。ただ、(4)で環境問題に対する認識がうまく表現されていないことが気になる。他のコンセプトについては、進化や活性化などアクションを想起させるようなサブタイトルとなっているが、ここは環境のみとなっていてアクションがないので、もう少し踏み込んだ動的な表現にした方がよい。

「招く」とは、利用者を招くという認識だが、環境も踏まえて考えると、「調和する」「共存する」などの言葉はどうか。例えば、「居心地のよい施設と環境への配慮」など、どういったことをやっていくのかがわかりやすい表現にしたほうがよい。「自然環境の調和」など、緑を感じられる、グローバルな視点に立ったアクションも入ってくると、とてもよいコンセプトになる。

##### (佐々木亨委員)

ビジョン(ミッションを達成した後の姿)とあるが、現状のビジョンは「学ぶことができる美術館、想像力を高める美術館」となっており、ビジョンはミッションを達成後の社会の姿のことも言及するべきだと思うが、その議論はあったのか。

##### (事務局)

内部でも議論し、こうしたミッションを近代美術館として持って活動していくことによってよりよい社会を作っていく、そういったよりよい社会が、我々の「ビジョン」とし、それに至るまでミッションを通じた活動していくという考えで、ここにミッションを達成した後の姿を入れるのはどうなのかという議論があった。

(佐々木亨委員)

ミッションを達成した後の姿が「ビジョン」となっている。ビジョンに社会の姿はあまり関係ないのか。

(事務局)

ミッションを達成した後によりよい社会の実現になると考えるが、ミッションとビジョンをきっちり分けて書いた方がわかりやすいと考え、今回はこういった形でお示した。

(佐々木亨委員)

現状、これが議論の到達点というのであればそれはそれでいいが、「ビジョン」には明確なアウトカムが入るべき。例えば、東京都美術館や三重県総合博物館、北海道博物館では、ハードウェアの変更時にどのように社会に貢献したいのか最終的なビジョンがあり、ミッションもビジョンに繋がっている。他館の動向は調査したのか。

(事務局)

他館の動向は確認している。今の御意見も踏まえて、このミッションの中にビジョンをどうやって入れるか検討していきたい。

(佐々木亨委員)

ミッションの中にビジョンを入れるということではない。ミッションとビジョンは別もの。ビジョンに、社会的なアウトカムの表現が足りないという意見。

また、前回の7月の会議の際に、一般の方に対しても意見聴取を行うという話があったが、それは今回の資料に含まれていないのか。

(事務局)

一般の方への意見聴取について、9月下旬から、ホームページやワークショップの形式で行うことを検討している。

(佐々木亨委員)

それであれば、ある程度できたものに対するパブコメを行うこととあまり変わらない。最大のステークホルダーは一般来館者なので、ミッションやコンセプトを作成する前段階で一般の方に意見聴取すべき。この進め方は最初から決まっていたのか。

(事務局)

5月の会議でお示したとおり、ある程度ミッション案を作成してから、施設整備に関する意見聴取にあわせて実施することとしていた。今のミッション案はまだ「素案」の段階であり、これから一般の方から意見聴取し、その意見を踏まえてさらに検討していくもの。

(佐々木亨委員)

9月の一般の方への意見聴取は、確定的なミッション・コンセプトではなく、ニーズを探ることができるような形で意見聴取した方がよい。

また、資料2について、過去の課題の延長線上で語っているだけとなっており、新機軸が感じられない。その点はどう考えているか。

(事務局)

新しい機軸の考えが現段階だと見えづらいので、今後検討が必要と考える。

(佐々木亨委員)

例えば、新規軸が既にあるのであれば、今課題として取り上げる必要がないものがあるかあると思う。その精査をしないで、全部課題としていたら結局過去の姿にすべて引きずられるような議論しかできないので、今後検討していただきたい。

(佐々木宰委員)

文言として表されるものなので、細かい言葉のチェックが最終的には必要になる。ミッション案について、「文化」という言葉をどこかに入れてもいい。1行目の「すべての道民が美術の持つ豊かさを」とあるが、美術館なので「美術」という言葉があることは当然だが、「美術」だと非常に限定された人達のもので、高尚な場所に足を運ぶようなイメージを持ってしまう。「美術」という言葉は大事だが、それを含む幅広い、文化的な内容があるというニュアンスを出した方がよい。「美術文化」というような広い概念を入れた方が、社会との繋がりが見えてくる。狭い美術の中だけのための施設ではなく、もっと広がりを持った社会に文化の側面から貢献できるような施設であることを明確に打ち出したほうが、より広い来館者を得られるのではないのか。

また、「北海道のシンボルとなります」とあるが、何のシンボルなのかかわからないので、文化的なシンボルなど、何のシンボルになるのかということを示すべき。先ほどの意見にもあったが、アウトカムとして示しているのであれば、それがわかるようにした方がよい。

コンセプト案について、言葉の選び方はもう少し練った方がよいが、議論の中身をうまく取り入れられている。ただ、キーワードとして伝える言葉は、多様性・国際性という観点から、他の言語で伝えられるような言葉選びをした方がよい。

(北村委員)

コンセプト案について、これまで議論した課題を盛り込んであることは読み取れるが、これを対外的に公開したときに、見た人は「わくわく」しないし、共感や納得も得られない。全体的に堅すぎる。つまらないという印象。

(佐藤委員)

フェルメール展を見たが、多くの人が来場しており、至るところで行列となっていた。やはり、キャパシティの問題を感じるとともに、展覧会が美術館に来る価値であると感じた。近代美術館にしかできない、国宝レベルの大規模な展示ができるということは道民にとってとても誇らしいこと。それをミッションやコンセプトで強調した方がよい。

ビジョン案に基づいて、ミッションがあると思うが、ミッションは全体的に表現が硬い。もう少し柔らかく、抽象的な表現にした方がよい。

コンセプト案について、「(1) 伝える」は美術館の基本的なことで強調すべきことになるので、ほかの4つのコンセプトとのバランスが合っていない。また、(3)と(4)は同じアクションではないか。5つにこだわらないのであれば、1つのコンセプトを膨らませていくのもよい。

(佐々木亨委員)

ミッションやコンセプトは、何のために作っているのかという意識がすごく大事。館の4、5年先の中長期計画を作るときのすべてのシーズ(種)が入っている必要があり、説明責任を果たす中長期計画の大元となるという意識を持って考えてもらいたい。

(佐々木宰委員)

資料2の4ページの⑩で「子どもたちが美術に触れる機会の提供」とあるが、教育プログラムのようなソフト面だけでなく、教育普及事業のための空間、施設設備といったハード面も含めていただきたい。

また、学芸員がやるのか、エドゥケーターを考えるのか、或いはボランティアとなるのかかわからないが、教育普及事業のための人材や、その人達を教えていく研修を行うこと、ハードであれば、常に状況にあった改修を行っていくといった持続的な取り組みができるようなことを加えていただきたい。また、学校形態がこれからどんどん変わり、生徒数が少なくなって、都市部の中でも少人数教育が生じる状況のため、子どもたちの環境の変化に対応できるようなハードやソフトと、それに合った人を育てるといった要素があった方がよい。

さらに、5ページで来館者のニーズの調査をするというところがあるが、非来館者のニーズも調査して欲しい。非来館者層へリサーチしてそこに対するアプローチを考えていくといった文言も加えて欲しい。

(佐藤委員)

資料2で作品購入の減少と収集方針の検討とあるが、これは購入作品が減少しているから増やすということなのか。

(事務局)

必要があれば購入するが、予算の状況に左右される。

(佐藤委員)

作品の収集方針について、予算が確保できないから今ある収蔵品を再編して新たなコレクションとするのかなど、収集方針は重要なことなので、まだ検討していないのであれば、検討は必要。

(山上座長)

近代美術館から、今後の検討にあたり、委員の方に教えていただきたいことなどはないか。

(事務局)

現段階ではすぐに出てこないが、改めて、ミッションやコンセプトを考えることは難しいということを実感した。今回いただいた意見を踏まえ検討し、検討段階で委員の方に教えていただきたいことがあれば、その時はお願いしたい。

## (2) 議題2 施設設備の現状課題

### ア 事務局から資料3に基づき説明

(特記事項) なし

### イ 質疑応答等 (有・無)

(佐々木宰委員)

資料2の4ページの教育普及に関することに対応した設備、教育普及のための開かれた空間あるいは、多機能な空間を、資料3の6ページの1から6までのどこかに加えていただきたい。

(菊地委員)

やはり、ミッションやコンセプトに新機軸が必要。過去の延長線上でまとめてしまうと、面白味がなく、未来志向じゃない。新しい軸があって、それに付随して施設設備も更新していくという要素があると、とてもわくわくすると思う。金沢21世紀美術館のように、他と違うものがあると、多くの方が訪れる美術館になれると思うので、これからの近代美術館ならではの新しい軸をコンセプトにもうまく反映していただきたい。

(佐藤委員)

施設整備の課題として、6つ挙げられているが、建築家をどうするかという問題が大きく関わってくると思う。そういった視点も踏まえて考えた方がよい。

(北村委員)

資料3は、今の近代美術館の施設的な課題がよくわかるいい資料だと感じた。この資料に基づいて、施設をどうするのか、ドリームプランを考え、それをどうリアルにしていくのかという作業が必要。この資料は、一般の方にも公開するのか。

(事務局)

この会議は公開しており、資料についても、広く美術館の現状を知ってもらいたいと考えている。

(北村委員)

一般の方に美術館の現状を知ってもらうためにも、公開した方がよい。

(佐々木亨委員)

資料の事例にある、金沢 21 世紀美術館や東京都現代美術館、東京都美術館のハード面の素晴らしさが現れているのは、検討する段階で構想やコンセプトの議論がしっかりと結実した結果である。ミッションやコンセプトを作る議論が良い方が、施設の課題を解決できる可能性が高くなるので、他館の建設までの議論の推移や組織について確認すると、参考になる情報がある。

(菊地委員)

ミッションやビジョンの裏側には、近代美術館としての課題や北海道の美術文化に対する課題という視点だけではなく、世界に対する課題認識、危機感のような大きい課題が必要。その大きい課題に対して、近代美術館は世界のこういう現状でこういう危機感を持っていると同時に、こういう可能性もあると感じているので、我々は、こういうふうにやっていくといった、一步前の課題認識のようなどころもわかりやすく表現していくとミッションやコンセプトが説得力のあるものになる。世界中からいろいろな方に来てもらうことを想定しているのであれば、そういった世界的課題に対する危機感も示すことは重要。

(佐々木幸委員)

作家やアーティストなどの表現する人たちの立場から見たときに、今の施設はどうかという視点は含まれていた方がいい。初期の会議で、次の世代のアーティストを育てる、発表の場になるといった話もあったので、見る側・利用する側ではなく、近代美術館を起点にして北海道の美術をこれから形成していくような人達のための施設的な機能をどこかに盛り込んだほうがよい。

(山上座長)

第 2 回の会議において、近代美術館設置時の理念で、「美術館はミュージアムである」として、ギャラリーとして貸してこなかったという経緯があるという意見があった。一方、ステークホルダーからは、道民が利用できるギャラリーや交流する場所が欲しいという意見が多くあるが、この点について、どのように考えるべきか。

(佐藤委員)

近代美術館は貸館がギャラリーの機能を果たしている。新しくギャラリー機能を増やすということではなく、今までどおり貸館を続けることで、ギャラリーの役割を果たすこととなるのではないかと。

(菊地委員)

ギャラリーは陳列していく、何か見せていくという意味合いがあり、一方、ミュージアムは、収集・保管・研究が主な役割という意味合いがある。機能の観点で話していくと、的を得た議論ができる。

(佐藤委員)

ギャラリーは一般の方が自由に発表できる場である。

(佐々木幸委員)

今の近代美術館のギャラリーは貸館ということだと思うが、こだわらずに考えた方がいいのではないかと。区別してしまうと、それに縛られて新しい動きができなくなるので、自由な展開が可能な形にしておいたほうがよい。国立新美術館はまさにそのタイプ。個人的には、貸館するかどうかはさほど重要なことではなく、企画展の質の方が重要だと思う。

(北村委員)

貸館とは別のスペースと考え、施設的にギャラリーのスペースを恒常的に作るのかどうか問題。他県では、県民ギャラリーとして別に建設されているところもある。集客する、様々なタイプの人を招くという視点であれば、ギャラリーはあってもよい。

(佐々木亨委員)

地域における、ギャラリーに関するニーズと供給できる場所がどれくらいあるのかにもよる。札幌はおそ

らく足りていないので、もし地域としてのニーズがあるのであれば考える余地はある。ギャラリーを持っている他館の美術館の共通の課題として、ギャラリーの利用者が企画展や常設展を観覧するという事は少なく、相乗効果がないことが挙げられる。その課題の解決策があれば、相乗効果はあるが、現状としては難しいと認識している。

(佐藤委員)

札幌にギャラリーは足りていない。道民ギャラリーを作って欲しいといった意見もある。ただ、近代美術館の中にギャラリーを作るかどうかについて、これを頭出しにするかどうかは別の問題なので、線引きして考えていった方がよい。

(菊地委員)

東京都美術館は公募展示室があり、そこは簡単にフックをつけられたり、タイルカーペットだったりと変わっていた印象があり、親近感があった。年1回大きいフェアを開催したりなどすごくいいと感じたので、参考になるかもしれない。

これは根本的な議論なのかもしれないが、美術館の役割は変化しており、第4世代美術館などと言われている中で、各地で芸術祭などの取組がかなり多くなっており、私が住む白老でも、ルーツアンドアーツという、地域が一体となって、新しい芸術を作っていくというような、作家と鑑賞者という軸ではなく、住人も制作プロセスに参加していくような動き、プロセスができており、ミュージアムそのものの立ち位置、役割みたいなものも変わってきているかもしれない。ギャラリーかミュージアムかという議論もそうだが、ミュージアムそのものも、もっと一般の鑑賞者も含めて、何か生かせるような可能性があると思う。

(佐々木幸委員)

釧路美術館は常設のコーナーはないが、その代わりにフリーアールスペースというコーナーがあり、そこは市民が活用できるような形になっている。その市民の展覧会で一番人が入るのは、子供の工作展で、わずかな期間にもかかわらず、親子連れでやって来るので、非常に多くの人が入る。だが、その多くの人々が美術館の展覧会を見ていくわけではない。しかし、地域の中にそういった空間があるということが、市民に根づいていくので、そういった活動はとても大事。ギャラリーを作るのであれば、道民全体に開かれたものであって欲しい。

(山上座長)

教育普及事業に関する施設機能の整備について御意見いただいたが、今後、施設整備を検討する上で、参考にすべき美術館があれば、教えていただきたい。

(菊地委員)

ありとあらゆる美術館をみた方がいいと思うが、白老などで住民レベルの町を活かしたいいろいろなプロジェクトがあるので、そういった草の根レベルのアートの動きやうねりを感じることができれば、参考になる。

(佐々木幸委員)

海外の事例のため、ウェブ等で確認することになると思うが、台北にある国立台北教育大学附属の北師美術館は、教育普及事業が充実しているため参考にさせていただきたい。

(北村委員)

「近代」の館名称が前回話題になったが、富山県立美術館はリニューアルに関し、「近代」という名称を無くして新しくなった。どういった経緯で「近代」を外したのか、実際に職員に話を聞くとともに、施設を視察してはどうか。

(佐藤委員)

今話題になった、富山県美術館には、屋上に公園があり遊具があって、子ども達の遊び場となっているのでそこも視察していただきたい。新しい美術館であるアーティゾン美術館や京都市京セラ美術館も参考になる。

(佐々木亨委員)

三重県総合博物館は、準備室など体制がしっかりできてから、オープンまで5年ぐらいあり、そこでの議論がホームページ上に毎年報告書として非常に詳細なものが公開されている。どういう手続きを踏んで、ミッションの議論をしてきたのか、ミッションに紐づく評価システムをどう作ったのかなどの報告書は参考になるし、現場でヒアリングすることも有益。

(菊地委員)

サンフランシスコにあるカリフォルニア・アカデミー・オブ・サイエンスは、世界で最も環境に配慮して建設された博物館で、素晴らしい環境配慮建築、文化施設。世界で最も配慮した博物館ができるとすればインパクトがあるので是非、参考に建物を見ていただきたい。

第5回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員

(敬称略、五十音順)

所 属	職	氏 名	備 考
株式会社 haku	代表取締役	菊地 辰徳	
北海道大学	名誉教授	北村 清彦	
北海道教育大学釧路校	教 授	佐々木 宰	
北海道大学大学院文学研究院	教 授	佐々木 亨	
前札幌芸術の森美術館	館 長	佐藤 友哉	

○ 事務局

所 属	職	氏 名	備 考
北海道教育庁	生涯学習推進局長 (兼) 道立近代美術館担当課長	山上 和弘	座長
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課	係 長	福土兼太郎	
	主 任	三國 桃子	
	主 事	宮下 直之	
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也	
	学芸副館長	中村 聖司	
	総務企画部長	豊村 洋	
	学芸部長	五十嵐聡美	
	学芸統括官	土岐美由紀	
	総務企画課長	今村ちぐさ	